厚生労働科学研究費補助金【エイズ対策政策研究事業】
HIV 検査受検のための性産業従事者や事業者等に対する効果的な介入に向けた研究
(分担)研究報告書

外国人 SW の現状調査と効果的な介入方法

研究分担者　青山 薫（神戸大学）
研究協力者　畑野 とまと（SWASH）
浅沼 智也（TRANS VOICE IN JAPAN）
山口 治男（神戸大学）

研究要旨

本分担研究では、現在日本で働いている少数の外国人 SW にアクセスし、聞き取りのデータとネットワークデータを得て、その質的解釈と分析から、この人たちがどのようなネットワークの中にあり、どのような社会資源にアクセスできているのかいないのかを具体的に明らかにすることをめざした。そして、これら具体例を端緒として、脆弱性を克服するようなネットワークへの接続あるいはネットワークの変換のモデルを見出し、外国人 SW とその関係者を対象に、実効性の高い HIV・STI 予防奨励と受検勧奨に向けた介入方法の検討に向かうことを最終的な目標とした。最終年度である今年度は、神戸と新宿におけるアウトリーチを経て、東京新宿で街頭に立つ 5 人の外国人 SW から記録を残す聞き取りが許された。そして、昨年度に引き続き、聞き取りの言説解釈および、聞き取り対象者を中心とするソシオグラムを基にしたネットワーク分析を行った。

アウトリーチ、聞き取り、ネットワーク分析によって表れた、法社会的立場がとりわけ脆弱な外国人 SW 層における現在目立った特徴は、聞き取り調査が可能だった外国人 SW は日本人の配偶者等または留学生の資格をもったことのある人びとで、結果として、聞き取り対象者の間では STI/HIV 感染リスクの高い行動は回避され、STI 予防を含む保健行動も法制度内で理性的に行われていた点に表れている。しかし、このことは他方で、脆弱性のより高いいわゆる「不法残留者」などからは話を聞くことができなかったことを意味している。また、リスク行動回避や保健行動が良好な外国人 SW の中でも、トランスジェンダー女性の SW は社会資源につながる機会がより少ない可能性も明らかになった。

以上から、本分担研究は、STI/HIV 予防奨励と受検勧奨の要は、留学生と比べても脆弱性が低くアクセスの可能性は高い日本人の配偶者等の資格をもって在住している SW である、と結論する。そしてこの人たちに、より脆弱な外国人 SW のネットワークを強化しつつ、検査受診・保健行動奨励の意義と方法を伝達してもらうアンバサダーになってもらう提案をするものである。

A．研究目的および用語の定義

以下に述べる本分担研究の目的は、昨年度の報告書に詳述した通りである。

日本で働くセックスワーカー（SW）の中には、外国人 SW も存在する。そして、日本における外国人 SW の脆弱な法社会的立場が、STI/HIV 感染リスク行動を促す、あるいは感染予防行動を阻害する構造的要因であることも昨年度と変わりない。また、外国人 SW はその脆弱性のために、脆弱性を克服するような社会資源にアクセスすることが困難で、社会資源を代表する人的ネットワークが限られたものである

こと、すなわち、そのような立場にいる外国人SWには、調査研究者も接近が困難であることも、変化していない。

そこで本研究では、目標を少数に絞り、現在日本で働いている外国人SWに聞き取りを行ってテキストデータとネットワークデータを得た。そして、その質的解釈と分析から、この人たちの人的ネットワークの状態と、社会資源へのアクセスの状態について具体的に明らかにした。さらに、この具体例に基づいて、脆弱性を克服するようなネットワークへの接続あるいはネットワークの変換をモデル化し、外国人SWとその関係者を対象とした、実効性の高いSTI/HIV予防奨励と受検勧奨に向けた介入方法を検討するものである。

なお、本研究における「外国人」とは、原則として、入管法による「特別永住者」と「特別永住者の配偶者等」を除く日本国籍以外の国籍を持つ「日本在留者」を指す。しかし、対象者が法律上どんな国籍であるかは聞き取りのみによっては不明のため、本研究では便宜上聞き取り対象者が自己申告する出身地をこの人の「国籍」国とする。なお、当事者による出自の表現は、「〇〇人」「〇〇と◇◇のハーフ」などさまざまである。また、本研究における「セックスワーカー（SW）」とは、売防法、風営法等関連法とそれらの運用、およびSTI予防の必要性を考慮して、「不特定多数の他者に対して金銭を代償に性交あるいは性交類似行為を提供し、これを生業または生業の一部とする人」を指す[1]。

B．研究方法

本研究では、今年度も昨年度に引き続き、外国人SWが仕事する地域におけるアウトリーチおよび当事者に対する聞き取りを行い、聞き取りを元に当事者を中心としたソシオグラムを描き出し、聞き取りデータの言説解釈とソシオグラムによる人間関係のネットワーク分析を行った。

1. アウトリーチ

対象地域は、関西地方では神戸市湊川公園から高速神戸線新開地駅南側に渡る湊川・福原地域、関東地方では新宿区歌舞伎町の都立大久保病院周辺から新大久保のいわゆるコリアンタウンに渡る地域。神戸では、2022年9月初旬および2月中旬に、新宿では中旬から下旬に、それぞれ夜半から翌2時ごろにかけて、分担研究者青山と協力者の畑野および浅沼が手分けし、街頭で客待ちをするSWと思しき人びとに対してアウトリーチを行った。人出が多い金曜と土曜の夜には神戸では20人程度、新宿では30人程度、どちらの地域でも少ない夜には数人が客待ちをしているように見受けられたが、その中には日本国籍の人が入っていた可能性も高い。

記録を許さなかった人も含め会話ができた人は、神戸で中国人2人、タイ人1人、ベトナム人1人、国籍不明の人1人の合計5人。新宿では、タイとオーストラリアの「ハーフ」1人、タイ人2人、キューバ人1人、ブラジル人と日本人「両方」と言う人1人（返答はもらえなかったが日系人か）、ラオスとシンガポールの「ハーフ」1人、モンゴルと韓国の「ミックス」1人、中国人1人、国籍不明の人3人の合計11人。総計16人であった。

調査に対する警戒はおしなべて強く、はっきりと嫌悪感を露わにして立ち去る人、体よく別の場所へ案内する人、時間つぶしの立ち話には応じても踏み込んだ話は避ける人、申し訳なさそうに断る人、などがほとんどだった。

2. 聞き取り

記録を残す半構造化インタビューをすることができたのは新宿の5人のみである。聞き取りの場所は、聞き取り相手が指定したホテルの1

[1] より一般的に用いられる広義の「セックスワーカー」（SWASH 2018：**）とは異なる。

室または路上で、時間は、交渉の間も含めて各人 2 時間程度。各人に、同等の時間に客を得て典型的なサービスをした場合の料金を申告してもらい、同額を聞き取り謝金として支払った。典型的な金額は 1 人につき 15000 円だった。謝金算出の考え方は、1 時間につき一律 3000 円としていた昨年度とは違っている。とくに東京都心の街頭 SW の収入のいわゆる「相場」に比べ、昨年度の金額は安すぎ搾取的であると考えたためである。

内容については、昨年度に引き続き、来日前後と現在の人間関係情報、STI 予防方法とその阻害要因、その他背景情報を中心にした。中でも重要なのは、STI 予防とその阻害に関わる問題として、暴力的な人間関係の有無とその対処法、仕事、移民、人間関係をめぐる自己決定権の行使状況についての応答である。

3. 倫理面への配慮

これも昨年同様であるが、本分担研究は、外国人 SW という特に脆弱性の高い人びとを対象とするため、対象者へのプライバシーの保護とインフォームドコンセントについて特段の配慮を要する。本研究はこれを踏まえ、「神戸大学大学院国際文化学研究科における人を直接の対象とする研究に関する内規」に従い、研究倫理審査委員会による審査に合格したうえで調査を行ったものである。

昨年度から変化はないが、本研究の特徴として、調査に対する同意書を求めないことを今年度も特筆しておく。もちろん、本研究も上記研究倫理審査も、厚生労働省「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」（令和 4 年）に即したインフォームドコンセントの手続きに準ずるものである。そのうえで、本研究は、社会学と文化人類学において議論が蓄積されてきた、法社会的に脆弱な立場にある人びとと研究者・調査者の間にある不平等な関係におけるインフォームドコンセントおよび被調査者のプライバシー保護の困難をも直視するものである [2]。したがって、本研究はとくに、被調査者が同意書に署名をして提出すべき事態を避け、その代わりに、調査者側が同意を得て調査を行うことや守秘義務を守ること等を約束し、署名した「調査協力のお願い」（昨年度報告書の別添資料参照）を対象者に渡し、相手がこれを保管し必要に応じて利用してくれるよう依頼した。

4. 聞き取りデータのソシオグラム化

昨年に引き続き、言説データのソシオグラム化を行い、これを本研究のネットワーク分析の資料とした。この手法を考案・開発したのは、フィリピン大学社会学部で移民研究を行うリッザ・ケイ・ケースズである [3]。

昨年度の報告書にも記載した通り、ネットワークデータ収集と分析は、本分担研究が対象とする外国人 SW のような法社会的脆弱性の高いグループにおける人間関係のネットワーク自体の脆弱性や偏りを単純化・可視化することに優れている。当事者を中心とした人間関係のネットワークは、その人がもっている、あるいはアクセスできる社会資源を代表しており、その偏りや脆弱性を可視化することによって改善の方向も可視化されやすい。

また、脆弱性の高い人々の場合、関係する人や出来事、経験を思い起こし、それらの関係を評価することが重い負担となる可能性、したが

---

[2] 青山薫（2021）「セックスワーク研究における当事者参加行動調査」社会学評論、71(2): 215-232

[3] Cases, R.K.C. (2021) 'Claims-Making and Recognition through Care Work: Narratives of Belonging and Exclusion of Filipinos in New York and London' in Schweiger, G. (eds) *Migration, Recognition and Critical Theory*, Springer, Cham. https://doi.org/10.1007/978-3-030-72732-1_6

って話したくない可能性、記憶の表現が不確かになる可能性が高い。さらに、多国籍多言語使用の対象者を想定せざるを得ない研究では、いわゆる「言語の壁」が厚い。少なくとも聞き取り現場での相手と聞き手の間の誤解、および、データ解釈の際の誤解がとくに憂慮される。本分担研究が採用したソシオグラム法は、これらの問題を克服するために、重点的な人間関係のネットワークに関する表現のみをつかみ出し、単純な図式にするツールとしても優れている。これによって、聞き手と聞き取り相手の双方が、聞き取り相手を中心とした人間関係あるいはその情報の何が重要視されているかだけでなく、何が欠けているか、隠されているかを想起することができる。

C．研究結果

1．アウトリーチの概要と考察

本研では、まだ新型コロナ感染症渦の影響で繁華街の人出が少なかった昨年度前半に、関西と関東において地域を定め、神戸と新宿をふくむ現場でアウトリーチを行うこととした。しかし、入国者に対する検疫措置のいわゆる「水際対策」が、2022 年 9 月に大幅に緩和された頃からは、繁華街に人出が戻り、とくに新宿でこれに応じて街頭に立つ SW と思しき人も徐々に戻ってきた実感があった。

そこで本研究では、期末の 2 月に新宿で、分担研究者と協力者 2 人が同時に集中してアウトリーチを行うこととした。この 2 月の週末には、歌舞伎町から新大久保にかかるおよそ 100 メートル×400 メートルの当該区域に、街頭に立って客待ちをしているように見受けられる人が合計 30 人以上いた。平日はばらつきがあり、日曜日は 6－7 人に減っていた。

観察から特筆すべきことは、神戸と対照的に、新宿では外見からも会話からも、明らかに多国籍の SW が混在し、混合国籍の人も目立っていたことである。混在していたと言っても、一定のグループごとに固まって立っていたり、ホテルに出入りしたりする傾向が見られたことも特徴的だった。一定のグループとは、大まかに言ってエスニシティによるグループで、より具体的には、1）タイ語話者と英語話者である香港出身者とマレーシア出身者、モンゴル出身者を合わせた「東・東南アジア系」グループ、2）英語話者であるフィリピン／オーストラリア国籍者と東欧系（詳細は不明）言語話者ほかの「白人」と見えるグループ、3）南米系スペイン語話者と近くに立つ人を合わせた「南米系」グループ、4）1 人だけで立つ英語／ナイジェリア語話者の「黒人」と見える人、5）ラオス／シンガポール国籍の人ほか中国系と見える人の「中華系」グループ、といった 5 集団に分けられる人びとである。ただし、これらのグループは、日によって人数が変化したり誰もいなかったりする。参考までに、日本人と見える人びとは集団にならず 1 人ずつ別の場所に立っている傾向で、その一つの理由は、マッチングアプリを利用していることと思われる。

このようなエスニシティによる集団化あるいは非集団化は、今後、SW とエスニシティの関係、エスニシティと管理売春の関係、トランスジェンダーSW と出身地の関係、出身国・地域における人身取引の傾向、エスニシティによる顧客の傾向等、複数の研究調査課題を導き得る現象である。これらの課題は、すべて STI/HIV 予防とその阻害に密接に関係するため記載しておく。

とくに 1）の「東・東南アジア系」のうちのタイ語話者 8 人ほどは、明らかにニューハーフで、集団的に客を取っており、この点で他のグループとの違いが際立っていた。路上 SW と言っても、全員が 1 つの小規模ホテル T に自由に出入りして複数で 1 組の客を相手にすることもあり、T を拠点にして仕事をしていた。後の聞き取りで、このグループは T のトイレを使い荷物を置くなど「拠り所」を確保する代わりに、客が付けば部屋を利用して収益をもたらす約束を T としていることが分かった。

2）の「白人」グループは、1）グループと同じ路地を棲み分けるように立っていた。互いに協力しているようには見受けられなかったが、フィリピン／オーストラリアの「ハーフ」の人は、調査者と親切な感じで会話をする中で、記録を伴う聞き取りには応じられない理由の一つとして、「みんなに迷惑をかけると困るから」と言い、同グループの他者に視線を送った。グループは客待ちの間は頻繁に雑談を交わしていた。東欧系言語話者の2人は、トランスジェンダーに見え、客との交渉、現場への往復を一緒にしていた。

3）の「南米系」グループは、2人が現場でもお互いを常に気遣い、オフの時も連絡を取り合う「友だち」ということだった。この2人は聞き取りに応じてくれたため、詳細は後述する。2人のうち1人によれば、別の1人は「いつも一人でいる」。「スペイン語も話す」が、「挨拶するくらい。お金にだけ興味がある人だから、話は合わない」と言うことだった。

地回りの「ヤクザ」が「たまに様子を見に」来て、トラブルがあったときには電話したりすると言う人もいたが、どのグループも現場外に監督・管理者がいるか否かは不明だった。しかし、4）の「黒人」の1人だけは、監督者・管理者の存在可能性を感じさせた。調査者と数言英語で会話したのち、それ以上の関わりを回避して、ナイジェリア語と思しき言葉で誰かに電話をかけたからである。

5）の「中華系」グループでは、聞き取りに応じてくれたラオス／シンガポールの「ハーフ」の人について後述する。この人は、当日立っていた他の3人など、同じ路地で仕事をする人は仕事のない日にも飲みに行く「友だち」であり、「寂しいとここに来て、1時間とか2時間とか居て、話したり」する存在、と言った。飲みに行くと、お互い中国語、タイ語、英語、日本語をミックスして喋る、とも言う。他の3人のうち1人は「タイ人」と言っていたことから、中華系タイ国籍者であることが伺われる。この人は、聞き取りに応じてくれようとしたが「言葉が分からない」と言うため断念した。

2. 聞き取りの概要と考察

聞き取りが可能だった人は5人。内容は、前述の通り、来日前後と現在の人間関係情報、STI予防方法とその阻害要因、その他背景情報である。中でも、これも前述の通り、STI/HIV予防とその阻害に関わる問題として、暴力的な人間関係の有無とその対処法、仕事、移民、人間関係をめぐる自己決定権の行使状況についてが重要であるため、以下、これらに絞って報告する。出身地、年齢、性別、性指向など属性はすべて当事者の自己申告による。

① M：キューバ国籍・37歳・ヘテロセクシュアル女性

17歳の時キューバで日本人男性（21歳）と知り合い、その後結婚して来日。現在は夫、娘（4歳）、夫の母と同居。来日当初SWのことは意識になく工場やレストランなどでアルバイトをする。しかし、賃金が安いため、知人の紹介で週3日ほどマッサージ店に勤務し始め、街頭SWも始める。店は合法店舗で出勤日も自分で決められ、電話一本で休むこともできる信頼できる店。街頭SWは独自での仕事で、同業の友人1人以外、店にも家族にもキューバの家族・友人にも、誰にも知らせていない。夫との仲は悪く、娘の養育はほぼすべてMと義母が担っている。義母は誕生日にケーキを買って祝ってくれるなど、Mのことを大切にしてくれる。同業の友人1人が常に助け合い、個人的な話もする相手と言う。

SWでは、現在月約10本で15−6万円稼ぐ。自分と日本の生活費に使い、キューバの家族に仕送りはしていない。

この仕事のいいところは、お金がいいことと「コミュニケーション」。暴力的な人間関係は、仲の悪い夫も含め、まったくない。

客の中には「ストレスいっぱいとか、怒って

る」人もあり、稀に乱暴なため逃げなければならないこともあるが、通常は、「頑張って」リラックスさせることで危険を回避している。常に近辺の既知のホテルを使い、逃げ方などを熟知していることでも危険を回避している。コンドームなしの本番は行わない。「生でやりたい」客は毎回いるが、客がしつこければ帰らせるか自分がその場を去る。「なぜ生でやりたいんだろう」という質問には「バカだから！」と即答している。

STI チェックそのものを心掛けてはいないが、健康保険（夫のものか本人のものか不明）に加入しており、近所の病院の「いいお医者さん」で定期検診を欠かさず受けている。「保険証があるから安い」と感じ、必要性がないためか、保健所の無料 HIV/STI 検査については知識がなかった。しかし、コンドームの付け方なども含む性教育がキューバではカリキュラム化されており、M も 12 歳頃学校で週一回あった性教育の授業を受けているため、性感染症予防は「しっかりしている」。そのような性教育が「日本にはないの？！」と驚き、笑っていた。

配偶者資格で日本に定住しているため、キューバとの往来も、マッサージ店勤務も合法で、移民としての問題は感じたことがない。

② A：ブラジル人と日本人「両方」（日系人の滞在資格か？）・自称 28 歳・SRS トランスジェンダー／ヘテロセクシュアル女性

母は日本人だがスペイン語話者、父はブラジル人。14 歳の頃ブラジルでトランスし、仕事がないので 20 歳で来日（前日には、父が母のいる日本に来て結婚し、A は日本で生まれ、いらい日本在住、と言う証言もしている。どちらが正確かは不明）。クラブなどでドラァグクィーンもしており、外国籍のドラァグクィーン仲間がいる。トランスの友だちはほとんどいない。路上 SW 同士はさまざまな牽制があり、喧嘩もあり、必ずしも連帯があるわけではない、と言う。警察の職質をよく受けるが、ほとんどが薬物検査で、「〔麻薬の〕売人が来ることもあるけど私はやらない」と言う。

個人輸入したホルモン注射を月 1 万円ほど打っている。SW についてはコンドームを必ず使用し、有料のクリニックで STI 検査を 3 か月に 1 度受けている。SW で怖い目に遭ったことはない。それは自分が人を選んでいるから。お客ともめないために、自分は「ニューハーフだ」と最初に必ず告げるようにしている。

収入がいくらか、貯金がいくらあるかは「いっぱーい！」と大笑いするだけで、教えたくない。自分のために使うことだけはっきり言う。しかし、その後、質問票を見返す調査者に対して嫌悪感を露わにし、「仕事じゃないよ。私ここでいるだけ。私エッチ好きだから」。「私ちんぽ好きだから。タダ」とも言った。

調査への警戒の強さ、国籍や来日の状況と、SW を仕事とし収入を得ているか否かに関して発言にぶれがあるなどの点からは、自らの状況への他者あるいは公的なものの介入を嫌い、入管法あるいは売防法による摘発を恐れている可能性が伺われる。このことからさらに、A には自らの法社会的立場に対する客観的な理解があることが伺われる。

③ L：ラオスとシンガポールの「ハーフ」・37 歳・ヘテロセクシュアル女性

十数年前（不明）に技能実習生として来日。60 万円業者に払い、月収 20 万くらいと言われて来たが、手元に 4 万くらいしか残らない仕事だった。一緒に来日した人の中には賃金不払いなど「騙された」ような人もいた。その後「友だちの紹介」で日本人と結婚し、4 年間「我慢して」「永住ビザ」（定住資格か？）を取得し離婚。15 歳の娘（日本国内で別居）がいる。

結婚以来、ビジネスホテル、夫の母が経営するレストラン、バー、観光案内などのアルバイトをし、現在も昼間は宅配便の仕分け仕事をしている。路上 SW をするのは資金難の時で、毎日ではない。いつもの場所に 1 時間か 2 時間か

居て、客がつかなければさっさと帰る。レストランで勤めた時の客など常連もおり、常連とは電話で連絡を取る。SW の月収は約 16 万円。通常、1 時間 15000 円から 2 万円を取る。「5000 円でやらせろみたいな人もいる」が、その時ははっきり断る。

常連と仕事をすることが多いので、暴力などの危険は少ない。危険と感じるのは、「生でやらせろみたいな人」、アナルセックスを要求する「最近増えてきてる」「変態の」客、酔った客。これらの客もはっきりと断る。「生ではやらない」と決めている。しかし、聞き取りを始める前に声をかけた調査者の 1 人には、「ゴムなし」で 60 分 15000 円、「90 分でもいいよ」とも言っていた。

路上では喧嘩もあるが、逃げ出してくる SW がいると「外で私たち助けられる」。客に盗みを働かれる時もあるが、噂もよく回る。つまり、近辺の見知ったホテルで見知った同業者と働くことで、危険に対処あるいはこれを回避している。また、いつもの路上の同業者たちは、寂しいとき話をしに来たり、オフの時に朝まで飲み続けるような「友だち」だと言う。

昔は「面倒見」料を払っていたような、ヤクザの人たちは警察が厳しいため最近はいない、と言う。巡回している警察も、「ヤクザだけ気を付けてね〜」と言って帰っていく。しかし、一度だけおとり捜査の警官に捕まったことがあり、その時は、2 週間留置された後仕事を一時止めた。薬物捜索の職質もあるが、薬はやらない。警察とはそれ以上の関係はない。

シンガポールに年に 1 回ほど帰国（コロナ期以外）。父が死んで以来帰国は減少。母と弟が、シンガポールとラオスの両方でシイタケ栽培を家業とし、そのためにした約 150 万円の借金を L が「頑張って働いて」返済。現在も月 15 万（毎月ではない）ほどずつ仕送りをしている。

国民健康保険に加入し、収入に応じて医療費・健康診断費が安くなることを評価している。STI についても健康診断を受けることで検査になると考えている。STI 予防ができない時はない。保健所で無料の STI/HIV 検査が受けられることを知っているか否かについてははっきり返答せず、「健康診断受けているから大丈夫」と繰り返した。国民年金にも加入している。

第一言語のラオス語と現生活言語の日本語のほか、タイ語、中国語、英語を話すと言う。日本語とタイ語が非常に流ちょうであることは確認できた。

④ H：モンゴルと韓国の「ミックス」・24 歳・非 SRS トランスジェンダー女性

自ら来日して 4 か月。日本語学校に通学している。日本に来たのは日本のアニメが大好きで憧れがあったことと、モンゴルではトランスの SW は「稼げない」（1 回 3000 円ほどにしかならない）ことから。モンゴルに元彼がいる。今は、とにかく日本語が上手くなりたいので、日本語の先生になってくれる友だちを探している。モンゴルに戻る気は無く、日本で生活していきたい。モンゴルのトランスジェンダー差別は「けっこうきつい」。トランスだとばれると男性から殴られることがある。知り合いのトランス女性は殴られていた。H は「ばれないので」大丈夫――ホルモンだけで手術はしていない。顔も手術などしておらずノドボトケもほとんどなく「親に感謝している」と言う。韓国の父はすでに亡くなっていて、行ったことも無い。

1 か月前から歌舞伎町で働いている。モンゴル出身で在日 7 年目の知人が、立ちんぼの場所や、やりかたなどを教えてくれた。立っている場所には、タイとフィリピンのニューハーフのグループがいるが、あまり仲良くはない。別に仲の良い友達はいる。日本語があまり得意でないので、客が付きそうになった時点で自身がニューハーフであることを告白する。ニューハーフとわかると、かなりの人が断ってくるので、稼ぎはそこまで良くない。1 本もできないこともよくある。朝まで仕事や待機をし、始発で帰る生活。平日は少しだけ寝てから学校に行く。

コンドームは、アナルでもオーラルでも必ず

使う。お客が射精を要求してくるが、ペニスをいじっても射精は苦手で断ることが多い。ホルモンの作用で乳腺が痛くなることがあり、それを客が力強くつかんでくるのが嫌だ。また、ホルモンの作用で鬱様になることがある。

暴力などは無いが、警察にいろいろ聞かれることと、たまにヤクザがきて、強い口調で脅したり睨みつけてくるのがとても怖い。

⑤ S：中国南部（その前はモンゴル？）・24歳・シスジェンダー女性

日本のアニメが好きで3年前独自に来日。「中国の南の方」から来た、と言うが、初めて会う調査者に素性を明かしたくないと言い、Hとモンゴル語で非常に流ちょうに会話していたことから、元はモンゴル出身の可能性もある。

専門学校を卒業した後、現在の1年間のビザ（就職活動を行うための特定活動資格と思われる）が切れると資格を替えなければいけない。国民健康保険に加入し、マイナンバーも持っている。

ホテル、引っ越し業、コーヒーショップでアルバイトをしていたが、2か月前から街頭SWを始める。現在もコンビニで昼12時から夜8時まで働いた後、あるいは夜勤で朝まで勤めた後、街頭に立つ。いつも近くで立っているタイ人のニューハーフの人にクラブで会って息が合い、問題を抱えていることを相談すると、「先にお金がもらえる」仕事としてSWを紹介された。問題とは、借金が70万円ほどあり家賃も滞納していることで、その理由は、心臓が悪い12歳の妹がおり、病気が悪化して高額医療がかかるため、自分の貯金をすべて出身家族に送り、友人にも借りたからだと言う。

通りすがりの男性から、「ここ変な人とかいっぱいいる」「警察の人たちもいっぱいいる」から危ないと忠告を受ける。一度私服警官に咎められ、初めて見る顔なのですぐに辞めるように、と言われただけで見逃される。しかし「お金の問題が終わったら、すぐやめる」つもりなので、「ちょっとだけ頑張ろうって、自分に言う」。ニューハーフの仲間に仕事の仕方を教えられ、「この仕事のルールがちゃんと」分かっている。そのため、暴れる客や窃盗する客の話も聞くが、自分は悪い客には当たっていない。

ホテルに入る前に客に必ず確認し「ゴム無しではダメ」とはっきり言う。「ゴムあり中出しもダメ、アナルもダメ」と言うと帰る客もいるが、性病などの問題を強く意識している。フェラチオもキスもせず、ゴムありで手でするだけ、と言う。仲間とする3Pは気に入っている。

中国人の知り合いは多いが、みな親が金持ちでバイトもしておらずクラブなどに行ってばかりいるので、誘われても付き合うことはない。対照的に、一緒に立っている「ニューハーフの子たちはみんないい子ばかり」と言う。

3. ネットワークソシオグラムとその考察

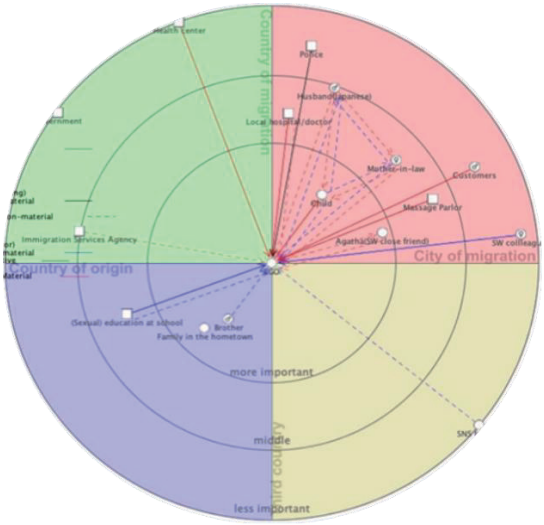
昨年度同様、ネットワークソシオグラムは、聞き取りから得られた人間関係（人的ネットワーク）情報を元にVennMakerというソフトウェアを利用して作図した。同じ情報が、上記の聞き取りのテキストデータ中にもふくまれているが、テキスト上のその他の情報は、ソシオグラムに考察を加える際にはいわば戻って参照し、「隙間を埋める」ことのできる情報である。

中心のEGOが聞き取り相手のSW（①M、②A、③L、④H、⑤）を、直線が関係を表す。EGOと直線で結ばれた□や○の印が、各アクターである。アクターには制度的な関係者や組織（□）と、個人（○）があり、個人はEGOの発言の範囲で男女に区別されている。

同心円は重要度の段階を示し、中心から離れるにしたがって、EGOにとってのアクターとの関係の重要度が低くなる。そして、4象限は、緑：ホスト国（日本）、赤：ホスト市町（新宿またはEGO居住地）、黄：第三国、青：送り出し国（①キューバ、②ブラジル、③ラオス、④モンゴル、⑤中国）を示している。

線の種類は、実線がセックスワーク、破線が非セックスワークにおける関係を、線の色は、赤が金銭の支払いなど物質的な、青が相談に乗るなど非物質的な関係を、黒が逮捕、軋轢、暴力などネガティブな関係をそれぞれ示している。不明の部分も多い。

① M のソシオグラム

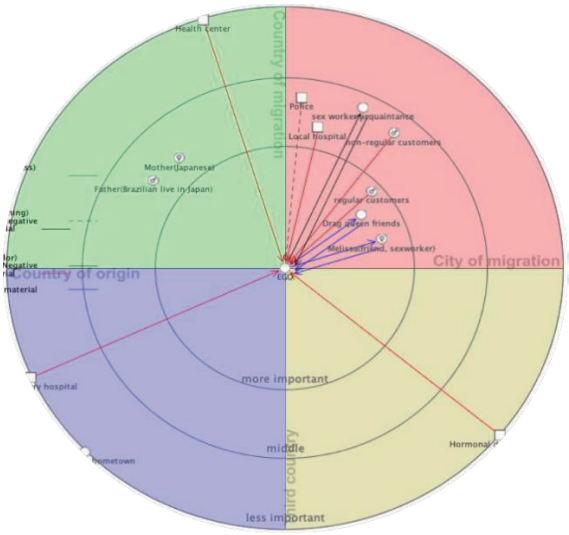


日本の家族との関係で、非 SW で物理的・非物理的な支援が見られる。この支援は相互的かつ各アクター同士のつながりもある。

対照的に他の関係は一方向的で、アクター同士のつながりもなく、それぞれ別個の関係になっている。家族以外で相互的なサポート関係を保っていると見うけられるのは、一人の友人だけである。SW について、所属する店を含めてこの友人以外の誰にも打ち明けていないことをよく表している。

特徴的なのは、性教育を受けた出身国の学校との関係で、SW に関する関係と非 SW 関係の両方があり、比較的重要度の高いものとなっている。これは、SW 内外での性感染症予防等性の健康と権利を守る知識と実践が、子どもの頃の学校教育に基づいて行われているからである。

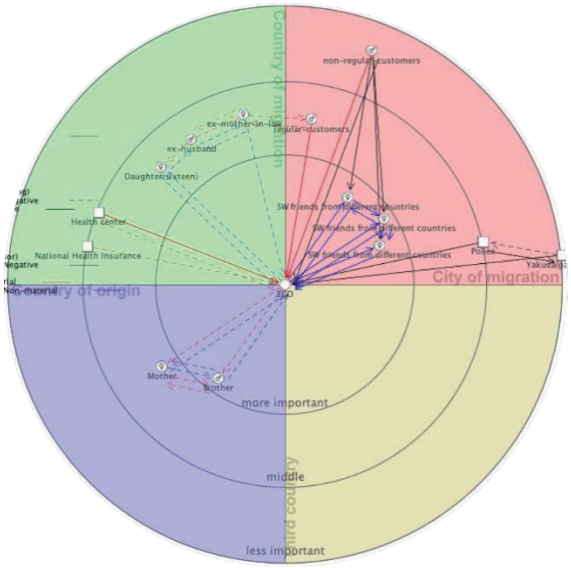
② A のソシオグラム



特徴的なのは、まず、SW 以外の関係についてほとんど表現されていないこと、次に、重要度が高い関係は非物質的支援を相互にしている SW 関係の唯一の友人と、ドラァグクィーンコミュニティだけとなっている点である。A が語りの中ではたくさん貯金があると言い、それは自分のためだけに使うと言っていることをよく反映している。他の SW たちとの関係はネガティブなもので、警察との関係はネガティブでも SW に関わるものでないことも特徴的である。

両親との関係についてはどのようなものか明らかにされていない。また、EGO 以外のアクターたち同士はまったくつながりを見せていない。語りでも明らかだったが、トランスジェンダーとしての孤立からか、複雑な人間関係については表に出さないことが強調されている。

③ L のソシオグラム

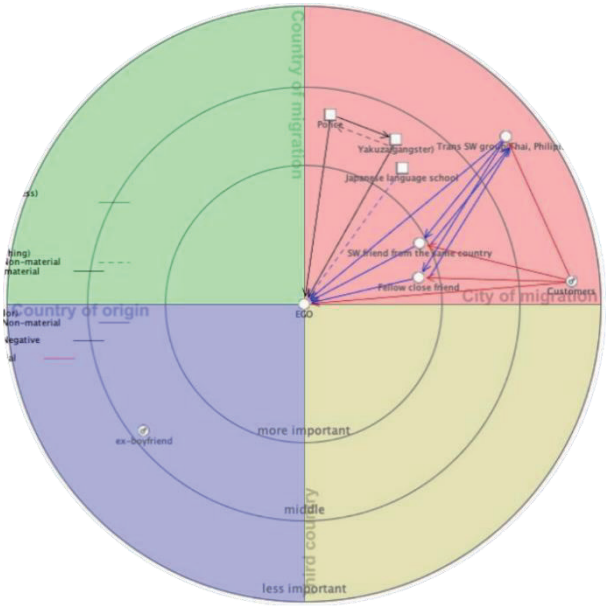


とくに聞き取り時間が長かったわけでも、聞き手との関係が近かったわけでもないが、5 人の中でもっとも複雑な関係が表現されている。L がとくに他の 4 人と異なるのは、SW、非 SW 両方に関わる関係において、異なる象限で複数のアクター間に相互関係がある点である。つまり、SW、非 SW ともについてネットワークが充実しており、社会的資源へのアクセスが良好なことが伺われる。

これは、L が結婚を経た定住者であり、日本の家族や健康保険等制度あるいは多業種の就業機会とつながりが保たれていることと、同じ路上に立つ同業者たちと友人として支援しあっていることに由来する。このことは、保健活動が物理・経済的に可能であるばかりでなく、語りにおいて明らかだった、生活者としての安心・自信があることを表していると言える。

ただし、SW に関するネガティブな関係も多く、これと SW 外の相互支援的関係がつながっていないことも特筆すべきである。健康保険制度・行動が確保されていても、警察とはヤクザとの関係と同様の負の関係しかなく、SW に関わる負の関係であることは注意要とする。

④ H のソシオグラム

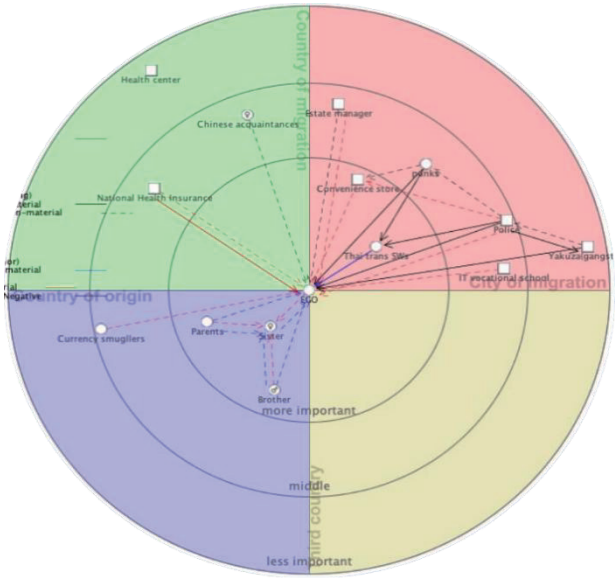


H のソシオグラムは、SW に関するもの以外の関係をほとんど表現していない。このことは A と共通し、二人がトランスジェンダー女性であることとも関わっている可能性を示唆する。H は、語りにおいて出身地でのトランス差別と虐待を明示し、これを移民の理由と暗示しているが、それ以外の出身地での経験や関係についてはほとんど言及していない。

他方、SW 関連の関係は充実している。SW を始めて間もないながら、最初に仕事を紹介した友人がおり、共に仲がいいわけではないと言うものの、「東・東南アジア系」集団に属しているため、SW についての非物理支援ネットワークが確保できている。

EGO と SW 外の関係として表現されているのは語学学校のみであり、いわゆる外の世界につながる語学学校が、社会資源の充実に重要な役割を果たすことが考えられる。それは、H の場合、SW 関係内で行っている STI 予防活動が自助努力に尽きることを考慮すればなお、重要であろう。

⑤ S のソシオグラム



出身地家族との関係の重要性が高い。その関係は、妹に向かう経済的支援が中心となっている。家族以外にも、非 SW に関わる関係について SW 関係よりも多く表現されていることが特徴である。

そして、SW 関係はほとんどネガティブなものとなっている。その中でわずかにタイのトランス SW らとの関係が非物質的かつ重要なサポートであり、健康保険に加入していることが物質的サポートになっている。しかし健康保険の重要性はさほど大きく表現されてはいない。

うらはらに、SW 外の関係の種類が多く、SW 外関係のアクター同士はつながっていないものの、アルバイト先であるコンビニエンスストアは、SW と非 SW の関係の接点となっている。学生資格で来日し、以来 3 年間と言う比較的長い期間滞在していることを反映していると思われる。このような S の場合は、配偶者資格を持ったことがないにもかかわらず、ネットワークが豊かで社会資源へのアクセス可能性が高いことを表している。

D．考察

アウトリーチおよび 5 人に対する聞き取りとネットワークの考察を通じ、STI/HIV 予防とその阻害を左右する条件・環境をテーマ別にまとめれば、1. 国籍または出身地、2. 日本滞在資格、3. 公的機関との関係、4. ジェンダー　になる。以下、この順に説明する。

1. 多国籍・混交国籍／出身地

新宿歌舞伎町新大久保エリアの路上 SW のもっとも目立った特徴は、アウトリーチを行った他の地区と比べて、多国籍でかつ混合国籍・出身地の人に接触できたことである。理由の詳細は移民研究に譲るべきだが、2000 年代に入った頃には新宿区民の多国籍化につて議論されていることから（箕曲・鈴木 2018）[4]、地域社会全体の傾向を反映していると言えるだろう。混合国籍あるいは出身地の人が聞き取りに応えやすかった理由も、この地区で混合国籍の人の母数が大きい可能性があるが、定かではない。いずれにしても、本研究にとって重要なのは、このような特徴をもった「外国人」SW が路上で客引きをしているということと、前述の通り、エスニック集団内に分かれたピア支援を行っている傾向がみられること、ピア支援はとくに東・東南アジア系の SW に目立つことである。また、上述の「黒人」と見える人と参考情報としての日本人と見える人たちのように、エスニシティによって孤立している場合にも注目する必要がある。

2. 入管法上の安定的在留資格

①日本人の配偶者等

一般に、日本人の配偶者や日本国籍者の親として滞在資格を持っている人、離婚後定住者に

[4] 箕曲在弘・鈴木琢磨（2018）「新大久保地区における在留外国人住民の多国籍化――都市部の多文化共生を考える前に――」東洋大学社会学部紀要、53-2：49-65

なっている人は、入管法上の就労制限がない。そのため、SWにおいても、合法の風営法店舗等で合法に働くことができるし、売防法の適用のされ方も日本国籍者と同等である。移民であることによる法社会的脆弱性が低く、路上SWをするにしても、具体的には強制送還の心配が少ないなど、他の資格で日本に滞在していている外国人SWより安心して働くことができる。

配偶者等の資格は、日本の家族関係とそれに連なる人間関係だけでなく、より間接的に、就労制限がないゆえのSW以外の就業経験と関係をもたらしていた。このことが、人間関係のネットワーク――ひいては社会資源へのアクセス――を充実させることも明らかであった。

上記と、聞き取りした結婚経験者2人が、安心に加えて暴力回避行動や保健行動につながる自己評価の高さを表していたこととの相関関係は、注目に値する。

なお、聞き取りしたAがこの資格なのか否かは明らかではなかったが、日系人として滞在をしている人の場合も、結婚（と離婚）や日本人の親としての場合と同様、「定住」という資格を得て、同等の法社会的立場の強さを得る。

②留学生資格

入管法は、留学生としての滞在資格を持った人が性風俗特殊営業店舗等で働くことを禁止している。売防法に抵触した場合は、日本国籍者とは異なり、強制送還を受けることになっている。しかし、聞き取りとネットワークの考察から明らかになったのは、留学生資格による人間関係・社会資源上の利益である。

留学生資格を得ればまず2年間、その後1年間は、学業が修められており経済状況が許し、法に抵触しない限り日本に滞在し続けることができる。風営法店舗に所属することよりも、売防法で現行犯逮捕されない限り法に抵触していることが曖昧な路上SWの方が、留学生にとってはリスクが少ないとも考えられる。また、留学生資格はアルバイトをすることができる資格でもある。長期滞在が保証され、アルバイトができれば、配偶者等に準じるとも言える人間関係および就業経験と関係のネットワークが形成でき、多くの社会的資源をもたらすと言える。

具体的には、結婚経験者にも見られた健康保険制度への加入とこれを中心として意識される保健行動や、SWの外の世界とのつながりによって何らかの助けを得、暴力や性感染症リスクなどの危機回避に役立つ可能性が、本研究の注目するところである。

3. 公的機関との関係

①警察

警察との関係はネガティブなものでありながら、SWについてほとんど介入されないものであることが、5人全員に共通する経験であった。少なくともこの地区で、この数年間は、警察は路上SWについて「見て見ぬふり」を貫いており、SWを摘発もしない代わりに危険から守ることもしない。STI/HIV予防についても知るところではない。

②保健所、医療施設、健康保険制度

5人のうちに、保健所の無料STI検査について知識があると言った人はいなかった。何らかの健康保健に加入している人は、かかりつけの医者・クリニックがあり、そこで全体的な健康診断を受けていた。一般的な保健行動は良好であると言えるが、SWを仕事としていることを考えると、とくにSTIについての心配にも対処にも言及がないことが際立つとも言える。

また、健康保険に加入しているか否かに関わらず、現場でのSTI/HIV予防はコンドームを使うことがもっとも強調されていた。しかしこれは、すべて個人の嗜好と自助努力に任されている状態であり、公的介入の経験の表現はまったくなかった。

4. トランスジェンダーとシスジェンダー女性

①トランスジェンダー女性

外国人としての脆弱性を低下させる滞在資格をもつ人でも、トランスジェンダーであることによって、出身国や家族との関係が希薄である可能性が示された。また、結婚して配偶者資格のメリットを享受する可能性は低く、日常における差別もあるため、多様な就業経験・人間関係を構築することに困難も大きいと思われる。ヤクザなどによる路上ハラスメントも明らかである一方、ハラスメントから身を守るコミュニティとつながることができるとは限らない。

タイ人トランスSWは、コミュニティと言えるものを形成し、ここに少数とはいえ他のアジア系のSWもシスジェンダーでもふくむ形で、非物質的相互支援を手厚く行っていることが明らかであった。他方、このコミュニティは閉鎖性も強いようで、調査者を遠ざけるばかりでなく、他のエスニシティを持つSWにとっては近づきがたいものと映っていた。トランスジェンダー全体の脆弱性を軽減するコミュニティとは言えないところがある。

②シスジェンダー女性

トランスジェンダー女性とシスジェンダー女性の脆弱性には、決定的な違いがあると考えられる。繰り返すが、シス女性は、結婚と多業種への就業の可能性がより高いことから、日本社会における家族と職場を通じた経験と人間関係につながり、制度にもつながり、より充実したネットワークを築く可能性も高い。SWの外に広がるネットワークは、SW内の危機回避のためにも、保健行動のためにも役立つ社会資源を代表していると言えるだろう。

E．結論――要は日本人の配偶者等の資格をもって在住するSW

以上から、STI/HIV予防奨励と受検勧奨の要は、日本人の配偶者等の資格をもって在住しているSWである、と結論する。

入管法に抵触する可能性が低く、仮に売防法で逮捕されても強制送還の可能性がほぼない配偶者等の資格者は、SWを含む日常を安心して過ごすことができる。同時に、定住や定住意欲が高く経済的にも比較的安定していて、自己評価の高さが保健行動やSTI/HIV予防行動にもつながっている。

これらは、当事者にとってプラスであるばかりか、調査や予防介入を考えたときに、外部からのアクセスが比較的容易であることを意味する。

本研究の限界は、アクセスできた対象人数が少ないことに加え、アクセスがより困難な「不法残留者」などおそらく脆弱性がもっとも高いSWには聞き取りできていない点である。この層に接近するには、日本人のSWや元SWに調査協力をしてもらうだけではうまくいかないことは、先行のエイズ対策研究事業でもすでに指摘されている（東ほか 2010）[5]。また、本研究では、脆弱性が低い層の警戒を解き、STI/HIV予防の自助努力を越えて広く介入するには、SWと非SWネットワークの間、および、孤立した個々人をつなぎ、公的機関同士の横の連携をつくり、これと当事者の関係を構築するアクターが必要である。

アクセスの可能性がより高い配偶者等の滞在資格を持ったSWに働きかけて、現在つながりが薄い各アクターをつなぐアクターになってもらい、ネットワークを強化し、検査受診・保健行動奨励の意義と方法を伝達してもらうことが

[5] 東優子・要友紀子・八木香澄・タミヤリョウコ・鍵田いずみ・青山薫・野坂祐子（2010）「個別施策層（とくに性風俗に係る人々・移住労働者）のHIV感染予防対策とその介入効果の評価に関する研究」平成21年度 総括・分担研究報告書

できれば、脆弱な層の脆弱性を軽減できるのではないだろうか。STI/HIV 予防と受検のアンバサダーになってもらうという提案である。

F．健康危険情報

特になし。

G．研究発表

1．口頭発表

1）青山薫，氾濫する性風俗言説・表象をどう読み解くか，学習院大学身体表象文化学会，2022 年 8 月 13 日

2）Kaoru Aoyama, *Sexual Minority Politics in Japan (in the World)*, IGS Seminar, Institute for Gender Studies, Ochanomizu University, Tokyo/Online, 9 November 2022

3）Kaoru Aoyama，*Research on Migrant Sex Work: Examples of Network Analysis from France and Japan*，The 6th MMC Regional Conference, Institute for Population and Social Research, Mahidol University, Thailand, 1 December 2022

2．書評

1）Kaoru Aoyama, on *Healing Labor: Japanese Sex Work in the Gendered Economy* (By Gabriele Koch), https://pacificaffairs.ubc.ca/book-reviews/healing-labor-japanese-sex-work-in-the-gendered-economy-by-gabriele-koch/ Pacific Affairs, Vancouver, 30 January 2023

H．知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
2. 実用新案登録
3. その他

なし